

でざるゆゑに、右神符の祟も妻女のみにも祟りたるならんと。さもあるべく覺ゆ。石浦神社の神異靈驗の傳話むかしよりありといへども、今現に著明なるを以て爰に載す。

○高山南坊舊第

此の第跡は、石浦神社の向、舊藩中は岡田氏等の邸地と成り、今師範學校の圍ひ内と成りたり。津田鳳卿の石川郡訪古游記に、大乘寺移居本多房州上邸側。尋再收寺地。賜高山右近長房爲宅地。といへるも此の地にて、そのかみ大乘寺も此の地に居たりし故に、舊藩中岡田氏の邸地なりし頃、折々骨瓶などを掘り出せりといへり。但し大乘寺の寺記には、此の地に寺ありし事を記載せず。龜尾記には、いにしへ此の地邊は山下と唱へ、金剛院と云ふ寺ありしかど、本願寺の徒に焚かれたりといへり。今按ずるに、右は慥なる傳説にてもありしか、其の據を知らず。又昌披問答に、高山南坊の舊第を本多安房の第地となしたれど、此は誤なりといへり。

○高山南坊等伯傳

高山氏實名は長房、右近と稱し、後南坊と呼べり。其の初め

中川瀬兵衛清秀と共に攝州高槻の城主荒木村重に隨從す。天正六年村重、織田信長公に叛く。信長公弘通耶蘇宗の事を以て、中川・高山を麾下に屬せん事を諭さる。兩士命を奉じて降り、荒木村重遂に滅亡す。信長公生害の後、豊臣家に隨從す。天正十一年江州志津獄合戦の時中川・高山、秀吉公の命に依つて共に志津獄の砦を守りけるに、佐久間盛政中川の守る砦を攻む。于時高山、寡勢にて衆に敵し難しとて援せず。中川清秀遂に死し、砦陥る。秀吉公之を怒り、高山の封を除かれ流浪せしを、前田利家卿之を招き、二萬石を興へられけり。高山剃髮して南坊と稱し、加賀藩に奉仕す。慶長四年三月利家卿世子利長卿への遺誠書に、長九郎左衛門・高山南坊、世上をもせず我等一人を守り、律儀成者に候。少宛茶代をも遣し情を懸られ可然存候と載せ置かれたり。關屋政春古兵談に載せたる慶長十一年九月十六日の奉書に、南坊等伯と連署し、同十三年二月十四日の定書にも、南坊等伯と連署す。此の時代は執政の列に加判して國務を執りたる事知られけり。又南坊は武道に長じ、文道に心掛けたる風流の士なり。故に金澤及び越中高岡の城地

は、南坊の繩量なるよし記録に見ゆ、又千利休の高弟にて不審庵七人衆の一人たり。利休傳書に、大徳寺門前に宗易の庵あり、不審庵といへり。前角は少庵住みたりし。七人衆は、加賀の肥前・蒲生氏郷・細川忠興・古田織部・牧村兵部・高山南坊・芝田監物、此の七人と宗且はいふなりと見え、三壺記にも、利休七人の弟子の内に勝れたる茶湯者也といへり。されば武勇のみならず、風雅の道にも長じたる事知られけり。但し從來那蘇宗徒の魁たるを以て、慶長十九年に阿媽港へ追放せられけり。三州志韃囊餘考に云ふ。慶長十九年甲寅三月七日高山南坊長房・内藤德庵・宇喜多久閑・品川右京・柴山權兵衛、天主法信仰の魁たるゆゑ京都へ送り、板倉伊賀守へ遞し、同九月廿四日阿媽港へ放送す。此の時南坊・其の子十次郎、横山大膳妻も南坊の女なるにより一集に送らる。徳川記に云ふ。三月七日高山右近を加州より西洋國に放つ。堅く耶蘇を守るに依つて也。内藤飛驒守忠俊等是に隨ふと。駿府記には、九月廿四日放高山南坊・内藤如安等邪徒百餘輩於阿媽港とあり。内藤德庵は飛驒守と號し、初め信長公に仕へ、十六歳の時六條合戦に功あ

り、丹後一國を支配す。慶長中瑞龍公に仕へ、四千石を賜へり。其の子采女好次千七百石を賜はる。父子共放送せらる。但し采女は後に歸朝し、能州荻谷村へ墾居す。子孫殘れり。宇喜多久閑は千五百石を賜はり、品川右京は一に右兵衛とあり、千石を賜はる。柴山權兵衛は五百石を賜ふと自註にいへり。平次按ずるに、内藤系圖に、德庵は元和二年於異國病死、悴休甫金澤歸參、荻谷村在郷仕。とあり。三壺記に云ふ。吉利支丹の張本内藤德庵・高山南坊・宇喜多久閑・品川右兵衛・柴山權兵衛、何れも上方へ遣されける。高山南坊の惣領は十二郎とて、天下一番の美少年にて、毎日能を致し諸人見物す。其の頃の流行歌に、能を見ようなら高山南坊おもてかけずの十二郎かやうに童ども歌ひけり。十二郎の妹を横山大膳に嫁娶せしを、南坊より斷りて、一集に上方へ同道せられ、哀成りける事共多かりけり。又金澤の甚右衛門坂の下に伴天連ありしに、是も南坊と一集に送られけりと見ゆ。又加藤蘭山私記に、南坊の内室は、横山大膳長知の娘也。南蠻國へ被遣節、内室へ轉び被申やうに達て被申に付、兎も角もとの